

さて、それから(小説)

その日(五)

「一人でまわいだつて
ダメだ」
「一人では何もできな
い」とゆうことは誰でも
どんな場合でも平気で
ゆう、としてもな
ことばだった。
それは理くつを先にす
るからで、女の中なんて
そんなもんじやない、
「よせん、理くつはあと
からつけたもので――あ
うように――」が、
とつたにおうたむづ
かしい面だいを前にして
そんな理くつをゆうゆ
うと田代が考えていた
わけではなかった。
できるだろうか、と
うだらうかと、足ぶみ
して迷っていたわけでも
なかった。
「まず、部落の女
の人達に集まっても
おう、
一けんづ、まわつてあ
るつてはたへんだか

ら、部らくをいくつか
にわけ、そのはずれめ
家から話をじゅんぐ
りつたへてもうおう、お
れはせまいから、村はづれ
にあつて、近所とつづいて
いない誰と水の家がま
う、あのおやしきんから
きつとすぐ話がわかる、
配給所の事で話があら
う、といおう、
田の事はみんなに直せ
つ、あいのないことだ
一人づとい、一人で答へ
その次に一人で決断を
くだせばよい、そしてそ
とをりにすればよい、別
むづかしいことではない。
しかし、その話のよく
わかるオヤジ、金沢三吉
の家についてみると、
田代はおどろいた。
「さしに広いかつちの左
しき、集まった彼女た
ちでいづはいふのだ。
三吉の妻のとき子も
まじつて、女ばかりの
会話が初まつた。
田代はまず、
「こんやあつまつても

らつたのは、光田さん
の配給のことなんだけど
……みんな、光田さん
んげに對するふそくあ
つた、何でもいふから
えんりよなくいつとこれ
と、いつた。
それからがたいへんだつた。
今まではかげでしかい
なかつたことが、おはば
でいえる、一かも坐しき
で、みんなとゆうこと
は、集まった彼女達を
満足させるのに充分だつた。
い、わけ、……
初めは、さうでありま
した、などとうう口語
体から、気がついたら、
「さうだつた」とゆう風
かわるしまつた、文章
について、やはり、口語
はむりでした。諒承を、
牧野、斗争と、
牧野における、
土地がほしい、
土地だ」とゆう声
民の土地に示された
執念、愛ちやく、すべ
てを立ちうる、初力
への斗争の火は、

民に、長いあいだ、う
なわれていた人間性
を回ふくさせたばか
りてなく、あらゆる人
々に、特に労働者に
人間性回ふくの呼び
かけをするべくつづ
つけたもの、としてうけ
とめなければならぬ
山は、誰のものなん
だ？、とゆう声
民のとい、に對して、初
めはくろ、次は白、そ
して又白、などとゆう
ことが民事事件にあ
つていひだらうか？
政府がわが、山のあり
方、に對して自信が
なく、したがって正しい
政策もなく、知りつ
つ、官有地、県有地
、公有地を、
戦争目的の爲
にだけ
必しとする資本
家共の自由にか
せよう、とゆうので
ある、
その考え方が完全

にまげにのである。
農民に残された
ものは何か？
全官有林をす
「農民のものにす
る運動を押し進
めること、
(これは、追いうちだ)
つまり政府は、すべて
をさらけだし、山を農
民にかへす、キツカケ
をつくつたこと、(セ
グメントの、山、いも
土地を今まで
どおり自由にする
し、いかに、の、山、い
ある。アメリカは、た
くさんの資本をグ
エトナムにつぎこんだ、
それが追ひだされ、
うとして、あがいて、
オ、中、朝、日本、
台、朝、朝、朝、
おすへらも、さめ、
とバクジンだぞ、
中国やソレンとよく
話、あつて、上、
し、あ、あ、あ、
佐とうとナ、